

懐疑と公共性

——メルロ＝ポンティのモンテーニュ論をめぐって——

廣瀬浩司

1 序

近著「政治における崇高なもの」のなかでマルク・リシールは、カントローヴィッチの『王の二つの身体』に一章を割いている¹。問題は、中世キリスト教世界の政治神学における、王権理論と受肉の神学との関係を、どのように現象学的に分析できるのか、ということである。たとえば彼は、本来象徴的な共同化を逃れ去るものとしてのキリストの身体(chair)が——聖体についての議論などを通じて——「神秘体」としての教会や国家に「組み込まれ＝体内化され(incorporé)」ていく過程を精密に追跡し、歴史的に確立された無意識のシステムの発生根拠を主題化しようとしている。

リシールの分析——これは、ミシュレやキネのフランス革命論などにも向けられ、さらにフィヒテ・シェリング・ヘーゲルらの哲学と関係づけられることになるが——を支えているのは、受肉(incarnation)と体内化(incorporation)の区別であるが、これがフッサール現象学に由来するKörperとLeib, corpsとchairとの区別に関係していることは疑いあるまい。この区別——そしてこの二者が取り持つ複雑な関係——をひとつの軸に、彼は、政治における崇高なものを暴き出していく。それは、ある社会の創設(fondation)という、あらゆる経験的起源に先立つ深淵(Abime)のはたらきに関係しているのである。

本稿ではこの書にこれ以上立ち入ることはしないが、こうした分析の先駆として、メルロ＝ポンティの名を挙げておく必要があるだろう。メルロ＝ポンティは「知覚の現象学」以来、身体論についての現象学的・存在論的分析を深めていく一方、「ユマニスムとテロル」「弁証法の冒険」といった書物のなかで、公共的な世界——すなわち、他者との共存と相剋の場としての社会的・政治的な世界——の発生論的な分析をめざしていたからである。言い換えれば、公共的なものに固有な規範性・法則性を分析しながら、どのようにそこに現象学的な発生の契機を見きわめることができるのか、ということが、彼の問いだったのである。

本論では、これら政治論文を直接論じるのではなく、彼のモンテーニュ論を読み直すことによって、いわば側面からこの問題に接していこうと考える。はたしてモンテーニュ的な懐疑は、どのように公共的なものを経験することができるのであろうか。

¹ Marc Richir, *Du sublime en politique*, Paris, Payot, 1991, pp. 83-107.

2 懐疑と公共性

まず、モンテーニュについてのエッセイが、メルロ＝ポンティの思索の発展のなかでどのような位置を占めているのか、簡単に説明しておく必要があるだろう。「モンテーニュを読む(Lecture de Montaigne)」と題されたモンテーニュ論は1947年のLes Temps Modernes誌に掲載されている²。このエッセイが執筆された40年代の後半に、メルロ＝ポンティは主著「知覚の現象学」の延長上で、どのように文化的・歴史的次元における相互主観性の理論を練り上げることができるのか、と自問していた。

さて、この時期の政治論としては、さきに挙げた「ユマニズムとテロル」がある。よく知られているように、この政治論には、以後の政治状況の変化、サルトルとの訣別などを受けて多くの修正が加えられていき、最終的には1955年に出た「弁証法の冒険」につながっていく。ところがモンテーニュについては、晩年に至るまでメルロ＝ポンティの対話相手であり続けている。だからこのエッセイにわれわれは、たんなる「知覚の現象学」の応用や彼の政治的立場の反映以上のものを読みとっていかなければなるまい。それによってわれわれは、メルロ＝ポンティが置かれた政治的な文脈から自由に、おおくの翳をはらんだ彼の思索の運動を追跡していくことができるであろう。

実のところ、このエッセイの歩みはさまざまな迂回と逆転をはらんでいる。われわれは以下で、この迂回と逆転をなるべく忠実に追跡していこうと考える。なぜなら、こうした歩みそのものが、懐疑が公共的なものを発見するためにたどらなければならない苦難に満ちた歩みにほかならないからである。

* * *

メルロ＝ポンティはまず、モンテーニュの自己意識を、いわば「自己を前にしたある種の驚き」から逃れることができないために、けっしてデカルト的な悟性のように自己を把握することができないような意識として記述することから始める(S, 251-255)。「判明な概念と思考の下に、彼[モンテーニュ]は、臆見と感情と正当化しがたい行為にあふれた自発性を発見するのだ」(S, 252)。それは、なんの外的な原因もないのにひとりて笑うことができる意識であり、たえず自己の前におのれの「分身(double)」(S, 253)を生み出しながら、たえずおのれの外に出ていくような、奇妙な自己意識なのである³。

この「意識に本質的な狂気」の持つイマジネールなはたらきは、動物的なものや身体

² その後この論文はSignes, Paris, Gallimard, pp. 250-266 に収録されている。以下本文中でSという略号を使用し、ページ数をそのあとに記す。

性、そして死をも、おのれの運動の中に取り込んでいく。

死は、存在の混沌した塊のなかに、われわれという特定の領域を切り取るのだ。死は、世界というスペクタクル(spectacle du monde)をひそかに活気づけていた、醒見と夢と情熱の尽きせぬ源を、比類ない明証のうちに引き出し、そのことによって、生のいかなるひとこまよりみごとに、われわれを出現させ、また消滅させる根源的な偶然を教えてくれるのである(S, 255)。

したがってモンテーニュの意識は、世界というスペクタクルに魅惑されることができるといえるような意識なのであり、「事物の裏側」をつねに「地平」(S, 257)として持っているような意識である。このようにメルロ＝ポンティは、モンテーニュの自己のなかに、彼が「知覚の現象学」で心理学や精神分析の力を借りて記述した、知覚的な意識およびその地平性を再発見することから始める。それは身心の混合体をおのれの活動の場とするような意識であり、つねに「動きつつある(en mouvement)」³意識なのである。

だがメルロ＝ポンティがここまでで満足したとしたならば、われはここに、哲学以前の文学的（彼は、ここでモンテーニュをブルーストにたとえている）な記述か、せいぜいのところ生きられた経験の心理学的な記述の例示以上のものを見いだすことはできないだろう。言い換えれば、観念論的思考（およびその思想史観）にとっては、こうした意識の狂気それじたい、デカルト的コギトに回取されるべきひとつの歴史的エピソード以上の価値を持たないのだ。だからこうした自己意識を記述してみせたとしても、観念論的な哲学とその歴史観の枠組みから逃れ去ってはならず、たんにそのネガを提示したにすぎない、という反論にたいしては、モンテーニュの記述はまだ無力であると言わざるをえない。

それではこの「世界というスペクタクル」に魅惑されたコギトは、どのように真理のごときものを再発見することができるのであろうか。ここでメルロ＝ポンティはモンテーニュとともに、このコギトを「公共的な生」(S, 258)という新たな場に据え付けていく。

だが公共的な生もまた狂気にあふれている。そこでは「おのおのが、おのれの思考の代わりに、他人の目や言葉に映ったその反映(reflet)を持ち込む」(S, 84)のであり、「公益(le bien public)は、われわれに、哀切ったり、嘘をついたり、人殺しをした

³ Cf., *Les Essais de Montaigne*, Ed. Pierre Villey, Paris, PUF, 1978, p. 929 et p. 834 : « Nous pensons toujours ailleurs ». 以下のモンテーニュの引用は、すべてメルロ＝ポンティによってなされているものである。従って表記も、メルロ＝ポンティのそれに従う。また翻訳に際しては、原二郎、荒木昭太郎両氏、またメルロ＝ポンティの論文の翻訳における二宮敬氏のそれなどを参照させていただいた。

⁴ メルロ＝ポンティは別のところで(S, 30)、Jean Strobinskiの«Montaigne en mouvement», *La Nouvelle Revue Française*, janvier et février 1960に言及している。

りすることを要求する」⁵のだから。こうした公共的な生の「呪い (maléfice)」は、複数の人間からなる生の「法」であり、こうした法の前では、ひとは「軽蔑しながら従う」ことしかできないように思える。この世界にも法はたしかに存在する。だがそれは普遍的理性として世界の狂気を統御することはできまい。モンテーニュ的な自己は、こうして世界の狂気と不可能な理性のあいだに引き裂かれた自己なのである。

だがもし公共的な生のなかにもなお「真理のごときもの (l'air de la vérité)」(S, 261)を見いだしていかなければならないとするならば、どうすればよいのであろうか。ここでメルロ＝ポンティは、モンテーニュの思考のなかに、二つの運動、二つの側面を見いだしていく。

第一の運動は、ストア派的運動とでも呼ぶべきものである。それは動物的な生の素朴さをモデルとし、それに無意識のなかで合一すること、あるいは死の感情と闘うために、なんらかの自然宗教を発明することである。「ひとつの生命の衰滅は、他の生への移行である」⁶。するとわれわれには、デカルト以前の思考にノスタルジックに回帰し、他者も世界もない地平に合一することしか残されていないのだろうか。

メルロ＝ポンティによれば、こうした運動はモンテーニュのもう一つの運動の背面にすぎない。まさにこのもう一つの運動において、モンテーニュはたんに自然の生に回帰するだけではなく、反対に他者と公共的世界とを、いわば発生状態で再発見するのだ。

まず他者について、メルロ＝ポンティはラ・ボエシーの死についての、モンテーニュの次の言葉を引く。

「彼だけがわたしの本当の像 (image) を享受しており、それを持ち去ってしまった。だからわたしは、これほど丹念にじぶんを描いている (déchiffrer) のだ」⁷。

自然的な自己への回帰は、他者とのより根源的な関係の発見とひとつの運動なのである。言い換えれば、懷疑が自己を解説することによって見いださなければならないものは、自と他とが真に出会い、友愛によって結ばれる関係そのものが創設される場なのである。「存在するとは、友人のまなざしのもとで存在することだ」(S, 262)。

ここでメルロ＝ポンティはサルトル的なまなざしの相剋論の彼方に、他者との共存の場を、モンテーニュとともに再発見しようとしているのだと言えよう。だがそれは、自己と他者とが平和に共存するイマジネールな世界を前提し、そこに安易に回帰することではない。それは自己の苦難に満ちた解説の果てに、経験的な自己と他者との区別に先

⁵ Ed. Villey, p. 791. メルロ＝ポンティは「ユマニズムとテロル」のなかでも、この一節を引用している。 *Humanisme et terreur*, Paris, Gallimard. Coll. «Idée», p. 68.

⁶ Ed. Villey, p. 1055.

⁷ Ed. Villey, p. 983 note 4.

立つ、対他と対自の「蝶番」⁸をふたたび見いだすことなのである。言い換えれば、経験的に自己とか他者とか言われるもの——そしてそれらを項とするシステム——は、この自己と他者との出会いの場によって作られるのであり、逆ではない。この場において自己は他者としての他者のまなざしに貫かれており、自己はこの他者との特異な関係の創設の痕跡を、世界のなかに読みとっていかなければならないのだ。このように自己と他者とがキアスム状にからみあう場を媒介とするならば、他者の存在は、外部における自己の「自由の表徴(emblème)」(S, 262)として解説可能なものとして現れてくる。

だがこの蝶番は、すでに創設された社会システムによってつねに隠されており、この表徴の解説は苦難を極めた無限の作業となる。ここには、およそ自然的な自我へのノスタルジックな回帰などは見られない。問題は、超越論的な独我論と自然宗教のわずかな狭間に、他者との関係の真理を発見することなのである。

さらにモンテーニュは、この自己と自己、自己と他者とのわずかなすきまに、公共の生を再発見する。公共的世界においてひとは軽蔑しながら従うことしかできないように思える、とききに述べた。だが「従うことが受け入れることであり、軽蔑が拒否することであるような機会、部分的に二重である生が不可能になり、外部と内部がもはや区別されないような機会があるのだ」(S, 259)、とメルロ＝ポンティは言う。公共の生が狂気にあふれたものであるかぎり、普遍的な理性を求めることも、あまりに意志的に党派的な選択を行うことも問題にはならない。にもかかわらず、ときにひとはこの生の中に、「自由の表徴」を見だし、自己と社会的なものとの出会いの場をあらたに確保しなければならぬのである。

「わたしは爪の厚みほども自分自身からそれずに公務(charges publiques)にたずさわることができた。また自分から自分を奪わずに、自分を他人に与えることができた」⁹。

むろんこのように自己が自己を他人に「与える」ことによって、「外部と内部が区別されないような機会」はつねにはおとずれはしない。公共的な世界の厚みは、他者との出会いの痕跡を覆い隠し、他者が自己に与えた根源的贈与に、あらたな贈与をもって応えることを不可能にしてしまう。だが、たとえばこの外部が生き難い強制として現れてくるような時、その時にこそ、モンテーニュ的な懐疑は、自明とされる公共の場に問いかけ、自己から自己を奪うことなく自己を与えることができるような場を見きわめなければならぬのである。

もしわたしを、わたしの性分にあったように(selon moi)使いたいと思うなら、活力と

⁸ Cf., Merleau-Ponty, *Résumés de cours*, Paris, Gallimard, p. 60.

⁹ Ed. Villey, 1007.

自由を必要とする仕事、まっすぐで短く、しかも危険をはらんだ仕事を与えてもらいたいのだ¹⁰。

だから自然的な自己への回帰の運動、懐疑の運動は、公共的なものへの問いかけの場を確定し、それとの出会いの場をあらわにしていく運動と、おなじひとつの運動なのである。「自然的なもの、素朴さ、無知をふたたび見いだすこと、それははじめの確信の恩寵を、懐疑においてふたたび見いだすことだ。懐疑こそが、このはじめの確信を確定し(cerner)、見えるようにするのだから」(S, 261)。言い換えれば、公共的な世界への回帰は、懐疑の放棄ではなく、その徹底化なのだ。それは、すでに打ち立てられた世界に問いかけ、そこに隠された公共性の発生の場を見きわめていくことであり、同時に、他者との一見自明な共存関係を揺るがして、あらたな関係の創設へと道を開いていくような行為なのである。

3 結論

彼の死によって未刊に終わった書『見えるものと見えないもの』のなかで、メルロ＝ポンティは問いかけ(interrogation)という名の下に彼の哲学を組織しようとしていた。それによれば哲学的問いかけは「モンテーニュのそれとはまったく同じではないような、真のque sais-je?である」¹¹、とされている。この真のque sais-je?なるものがどのようなものであるのかの検討は別の機会に譲らねばならないが、われわれの分析によって、この真のque sais-je?なるもののひとつの側面はあきらかになったと思われる。それは、懐疑は、おのれを徹底化することによって、おのれのなかに公共性の経験の発生を確認しなければならない、ということである。

だがこうした方法がどのような迂回と逆転を経なければならないかも、われわれの分析はあきらかにしてきた。懐疑は、自己とその外部とのあいだをたえず往復しつつ、その境界を打ち立てたり、ずらしたりしながら、しだいに公共的なものの法則と発生とを暴き立てていかなければならないのである。しかしこのことは逆に、公共的なものの「経験」そのものが、けっして直接に現れるものでも、また社会学的に客観化可能なものでもないことを物語っている。それはほとんど狂気に満ち公共の世界のわずかな隙間に立ち現れる。だから、公共性の存在論は間接的な存在論とならなければならないのである。

言い換えれば、懐疑は、世界の現れのさまざまな次元において、内部と外部との結節点を経由していかなければならないのであり、そうした結節点に、発生的契機を見いだ

¹⁰ Ed. Villey, 1021.

¹¹ *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, p. 170.

していかなければならないのである。懐疑が通過しなければいけないこうした象徴的なものの厚みのことを、50年代のメルロ＝ポンティは「制度」¹²と呼んでいた。制度の哲学は、多元的に織りなされる象徴的な構造の法則性・規範性から出発して、そのなかに問いかけの場を探る試みであり、懐疑の歩みを、背面からたどっていきこうとする——実は懐疑と不可分な——試みなのである。

このようにメルロ＝ポンティがモンテーニュに読みとっていく懐疑のほとんどジグザグな歩みは、彼の思索のそれでもある。彼自身、基本的にはデカルト的なフッサールの「懐疑（エポケー）」をひとつのモデルに出発し、しだいしだいに芸術・言語・政治などの厚みへの理解を深めていくからである。メルロ＝ポンティの懐疑はフッサールのな超越論的独我論と自然哲学のあいだ、歴史性の哲学と構造の哲学とのあいだを縫うように進んでいくのだ。

この歩みは、また過去への問いかけの歩みでもある。彼が生涯問いかけた相手がデカルトであったことはよく知られているが、デカルトの哲学の転倒は、その単純な乗り越えによってでもなく、デカルト以前へのノスタルジックな回帰によってでもなく、「以前」と「以後」とのたえざる往復運動のなかにさぐられていかなければならないのだ。われわれの過去への問いかけそのものが、ジグザグで側面的な問いかけとならなければならない。

ここにある種の論者のようにメルロ＝ポンティのためらいを見るべきではないだろう。ここにためらいを見る視点そのものが、メルロ＝ポンティが斥けた二項対立のひとつの立場を代表することか、あるいはそれらを弁証法的に総合することで成り立っており、公共的なものや制度的なものの「経験」を、取りのがす結果に終わってしまっているからだ。われわれはなお、問いかけと制度との交差点にきらめく表徴を解説し続けなければならないのである。

¹² この点についてわれわれは、パリ第一大学新制博士号取得論文、*Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty*; Lille-thèse 1993 で詳説した。

中世末期・ルネサンス期における
フランス・ユマニズムの史的展開に関する総合的研究

課題番号：05451084

平成6年度科学研究費補助金（一般研究（B））研究成果報告書

平成7年3月

研究代表者 支倉 崇晴
（東京大学教養学部教授）